環海異聞

[illegible] 十五

林一又

k 44

富士川文庫
290.9
Ka
11

F 11
カ-76

290.9
K
No.2525
凡 K 44
慶應義塾大学医学情報センター 昭和47年6.1.20
富士川文庫
174

本所 三叉

環海異聞巻之十五

雑事

寛政漂着せしオンラレイツケといふ嶋を始として おしオロシイアの手に属せしハ「セリコフ」といふ人なり此人ハ諸国遍歴せさせられしとぞムスクワ産れの者なりイルコーツカにて去ル卯の年病死六十二三ときけり仍て思ふに右の意を候せし

三十年も前のことなるへし此セリコフといふ者ハ十
三四歳より十七八才まてキセロフか父某か代に馬牽
の奉公しける者なり生得利発なるものにて頗る出世
し遂に商賈方の番頭となりキセロフか手船
オホーツカカミニヤーツカ此両港往来し此舟に乗り
居りし内初てオーツカを見出し船をよせて
容子を伺ひしに鯨及海獣の漁猟ある場所と
見定められ夫帰帆の上此事を語りしに王廷へも
告訴して再ひ発帆し之を導き是を懐け其土に入
むとこそ地に至りぬ時に土人見馴れさる舟と人流（あやしく）
こを恠しみて漁猟に用ゆる銛（モリ）数百本を擲ちて
船中へ打かけたり船子共これを防きかね手負許多
怪我せし者も数多に及ひしにセリコフ謀
略をめくらし漸くこれをいひ諭し上岸するを
得て遂には今のことく手に入て悦服せしむるに至て
為せしとそ此後は本国より舟往来し交易なり

擬（ナロフ）ひ聊かの物を与へ数多の獣皮を貢納せしむるより追々其地に役所を建て役人を置き二ヶ年に一遍ツヽ交代し貢物を送り獣皮残らさる事となれり扨セリコフは此帰国の後右大切によりて王上ゟ俸禄支職を賜り家富み栄へ今のキセロフ尤肩を並ぶる程の富豪となるスト。シリヨンの身上なりと人々噂し称せりとぞスドシリヨンに百万といふ事なり然れどもキセロフハ悪敵の家なれハ同家の手を離れず諸商賈並に右乃役人へ送る交易代物等もキセロフ方に残し纏り然るに近年手代業かまて病死せり扨商人中宮の者か手しキセロフか継ひ並し営けるをそれに其大商木富を背むとしけれともセリコフ在世の内ハ彼か手安かりて是を操り各内評のこまて決りしかセリコフ死去の上ハ操る

而なしとて何れも申合せ侍るにキセロフとハ其の
中字を除きたり此者後キセロフか仕出しの船元
ミえれきしくまて行遠お来又近年オホーツカより
北アメリカに仕出せし船帰帆せす三年を経ても
行方志れさる事のミ手懐しきる事多し
皆彼好人とものみ為にてやと難ひ法ふ居き
しとそ
此度漂流せし事をナアツカより送りて本国へ帰帆
せし母并に船頭もセリコフか手の者なりしとイル
コーツカへ告せし汝ハ已にセリコフ泉客となりしとて
舟子のもの浮きりき遂て其後家にあひなり（今に十かし余）
なる歴し女子壱人あるのミにて親お續の者れし丈夫人
今ハ後家となりてムスクワに引越し居住すと於
此女子の身も持まへし多くの縁も大きつらひをせりとの
噂なり親なれとも丈の切によりて王ミすりの家にも
引續き勤めり自由なる度のありとやかゆ

ナアツカ主妻のオロシア人に五六十才と見ゆる人先
年此島へ神ゑし渡りし時猟人より蒙りたる銛（モリ）
疵の痕なりとて臂を出して見せ又セリコフも耳
をかし傍にて死せりときけハ島の彼に寄せしか
壹さてすまハおろしと見ゆ
カミシヤーツカより松前の方凡十八日の路あるし
オロシイアの領分となりて島の酋長をワシライ
といひし由此人セリコフとたるに漂流を經見りし人

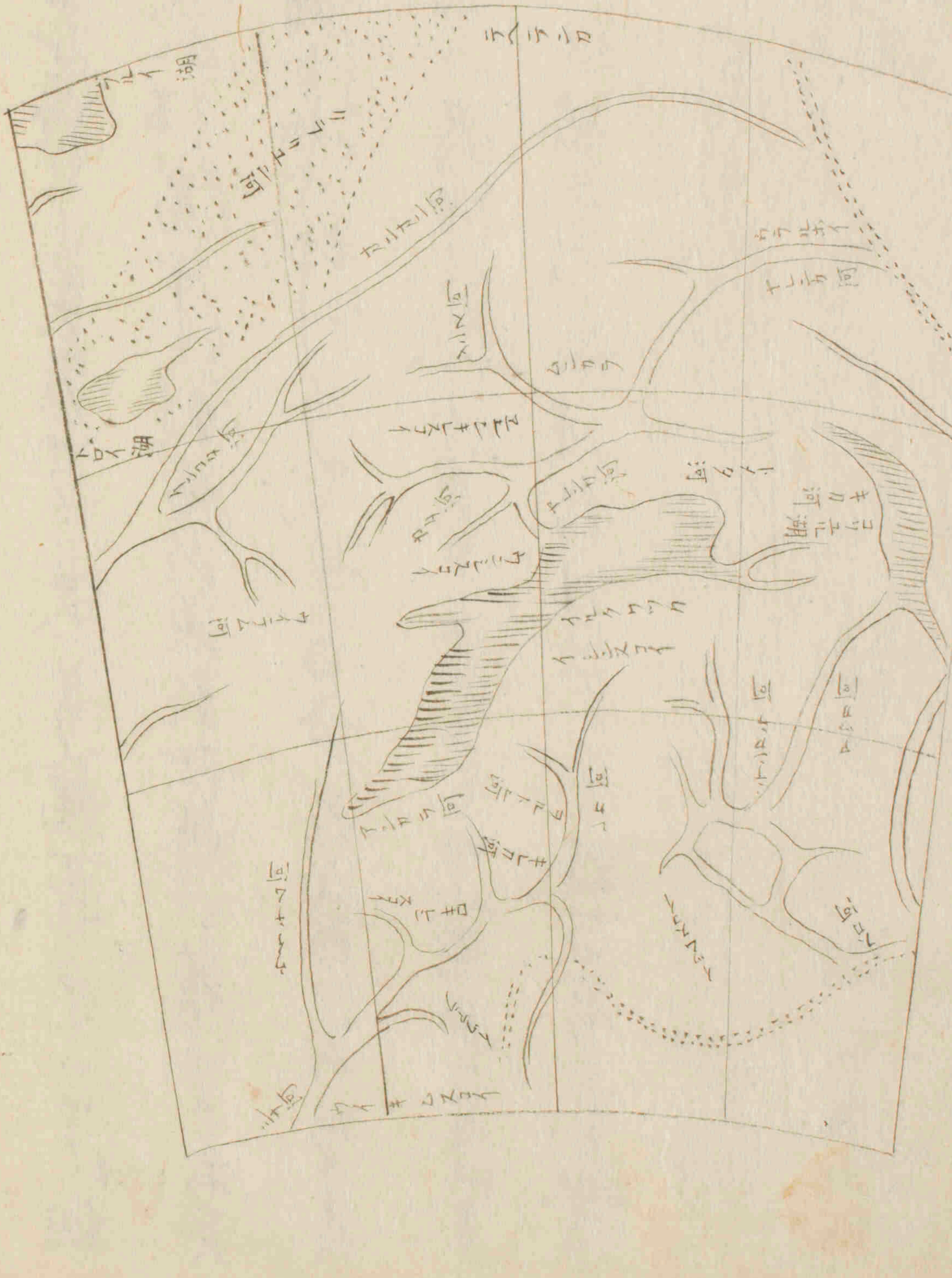
穀類として
大麦（ヱチ タシン）挽割にして食ふ油（マスラ）をかへ煮食ふ
或ハ食せす何にある時たまし用ゆ常食ハ裸麦（ハダカムキ）
アリ（セメ）の蒸餅（ケレプ）を用ゆ只異安まて其紀の時ハ銅銭十
八銭也紀の年ハ五十銭より百銭を去ル酉戌の年ハ
大凶紀なりしか二百八十銭より三百銭まて貴く
賣せり小麦（セニオ ミノ）はその年ハ二十五銭程なるか
右の年ハ大小麦ともこれに準して價高なりし

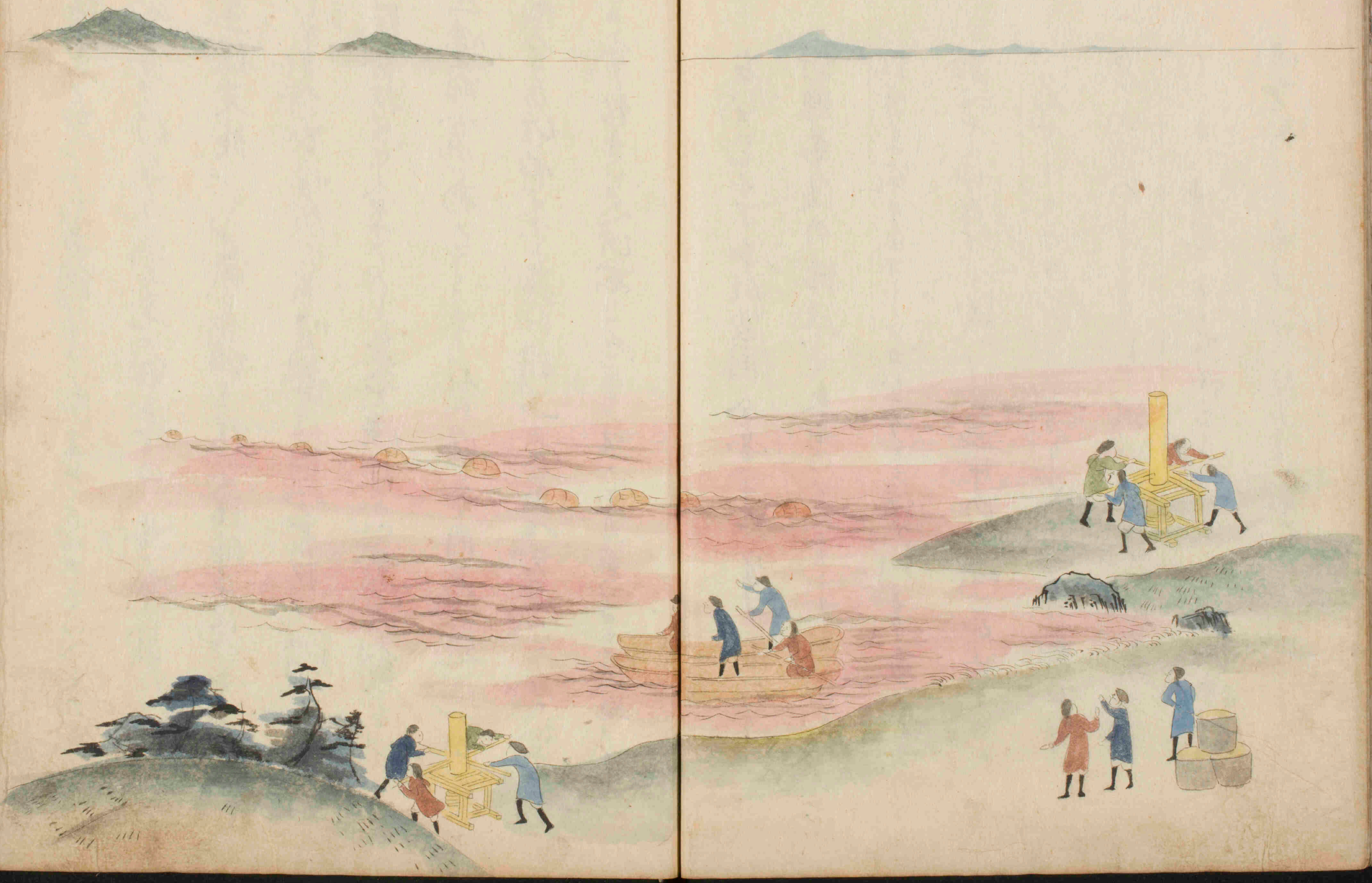
毎小麦も粉にして蒸餅に作り余る（おノマヽ）柄に製し
麦よりハ用ひず蕎麦ハ挽割にして売る事外の
穀類よりハ一二銭も価安し挽割并に粉の類
水車の臼を用ひて挽ける所イルコーツカより
旅府下の在中カラスナヤリウケの辺よりハ風扇を
用ゆとて此田路傍なる所に往々にあるを示し
まて見うけたり
漂民ども寓商キセロフが許に借宅して居りし内

サーモーリフ（バイカル湖）といへる大湖へ漁猟に出する事有
九平其人々にかゝりて行きたり凡此湖水の漁猟
をハイルコーツカより南にあたりて千里程有り
（これ彼里数なり又七百里余ともいふ日本里数にてハ二百里にハ足らざるべし）イルコーツカ近傍の諸
地ハ此湖より漁る魚類を運送して用ゆキセロフ大金を
出し是を請し他の商人中間と共に彼湖へ網方
の猟にやりたりこれ去る戌の年の事なり其
三月なりしか九平等も其人数にかゝはり漁所より

川船にて八艘七十人余りにて船ニ被漕わせり（大船の内へ小船をもつミ入しに）南へ向ひ六千里登るこれ湖水の水なれし筋にあつる所まてコフライといふ地なり（寺有「ミコノチナコトトボりといふ）此所より湖水へ舟を通しそれより東に向ひ山伝へ湖畔を川舟にして七百里行きアニカリツケ（路にみゆるアニカラ河南畔の湖畔なるへし）といふ所に岩此程なる山まて塞り石山なり或ハのほり或ハくたり険阻を越へてこの所に舟を牽き掛けたり本所を発船して二（本ノマヽ）十一日を経し岩崖せり丈より場所を見るとて綱をおろし滞留中一艘にて魚数を漁り獲たりあるハ川細なり地川のごとし百八十尋弐百ひろ所あり其中すゝモリといふ魚タイメンといふ魚夥敷所あり毎り皆是を塩漬樽詰にして数百箇となれ

右ハオロシイア本所惣国全図より写す所なり
此條前後の話説と参考すへし イルクウツカと
記する所イルコーツカなり其傍の川より南へのほり
船にてゆきし越へし 図中の大湖ハ即ハイカル
一名ザーセリヨヨリムミカリと記せるハ蒙古なり
唐山境の方なりレナ河ハ「ヤコーツカよりイルコ
ーツカへ溯来る支流なるへし これかれ平にて此
図をおし示して然す所之



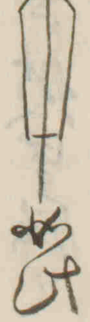


又場所をかへて曳網してオミヤラレナといへる大魚
弐尾を得たり其一尾大なるものは拾弐貫目あり
これ又段々裁ち切り樽に詰塩漬にしたりさて
ミヤライと呼びて明礬に似たる物あり（按消石の類か）是に
塩を拌き合せて魚を漬けるこれ此の大魚をは
二味調合のあらされは塩氣肉まで透徹せん
とするなりあまりて漬け置く生は幾年経ても腐敗せ
ざるなりされとこれ所にても才ゝモリ臭氣も又験く

網に入りしかとも塩と金とに限りありは見さりし
曳網を收め右塩漬の樽を乗て舟に積へ海航
せしは去六月にして本所に海着す
右湖畔にヘナレコスといふ種族の人数あり此邑これ
等か住所地面ゆへ舟壱艘に付銀五十枚又百五十枚
を運上とし曳し与へて網を曳たり
ニコライ河源の向ひにあたるこなたの湖畔より舟を
隔てあなたの南畔まては湖上六十里ありこれを渡り

山越に険しけれハモヽカリツケ蒙古のうち漢地へ入るの
道中なりといふ冬月湖水一面に氷りつめたるときハ
ケリイスコイ漢地より商人の通路氷の上を渡り
通るといふ又それよりイルコーツカ迄の川筋も氷り
はりつめたる故氷の上を往来し通路至便利なりと
いふ暖気の節の通路ハ南の湖辺山際を湖に
沿ひ廻りしてまたその湖畔へかゝる事三百里を経て
ニコライ河辺へ来る事近きなりとそ支那境へハ

七百里ありといふ（我二百里なるへし）
此湖水ニ嶋有し中嶋もあり里数も彼里法にて
一千里（湖水のちさき）ありといふ岸ハ殊に深しとそ（常に水気を彩れる事赤きまてに悟むするうれ）
此湖畔の上手ウヱリホノアンカリツケといふ地の近傍に
住む夷人ハ即トヽゴスなり此者共定れる家居なく時
々に居所を移す（これを旅舘ともいふへき）ハ木枝を
たてならへ其上より樺の皮を引延し囲ひとす是廠（コヤ）の
西邦に横に木を架し自在といふへき物を下け鍋

とらへし牲を得る時ハ生食して食物ハ鳥獣虫蛇
得るにまかせ時に臨みてハ火食をなすといふ鹿の乳
汁を飲むなり他の牛豚を用ゆることなし且鹿を馴し
飼ふ事馬のごとく乗り行き又あやまちも鉄すれ鏃射
いふ事ハ甚く妙を得たり弓ハ木にて作り長さ三尺
五六寸有他の獣の射ることハあまりこちらまで矢を
後ろの方へつけて射発つ之第の鏃ハ如此
鏃にして長さ四寸許あり矢ハ鳥羽三枚を付る也

あるは矢筒を脊負て行くなり其弓にも妙を得しと
いふ天に飛ゆき虚空に射あげたる矢は地より又揚き
あるもちて其空中の矢にあたり射とめて下る程度
あるもちてもあやまちすこれなきは手はまさしく見て
目を驚かせりと

ソーボリ貂は此国中の名産なり隣国に接
むとのむさ好なり（上品の皮にて銀七十枚程なり）梅湖の通りハ
栽くたる雪山なり其雪深く海ソーボリ其所にておつ

トンゴス邑を攻すまして 能附属といふオロシイアの領地となりし 後年〻此皮を貢ぎ候て此貢を元立のゝ免且古地の立帰りよアンガリツケ又はオロシイアより役人二三人在勤する之
トンコスは夷狄の佛像を正宗と崇す皆様にて作れり又假面よ作りて祭り尊し之アンガリツケ又雅治有りて仏像并に彼矢鏃に画を作れり
トンコス党より衣服ハイルコーツカにて買ひ求め皮裘并羅紗類の被を着用す男女共に同しイルコーツカへこれを調ふるために往来し漁獵の党皆〻アンカリツケ又小屋を建居住せし因ハトンコス党二三十人も集り右にもいへる家を作りて住めりこれハ此方にて漁り魚類をとらひ得んとしてなり引網の手當に雇れと相保れハ手當錢をとるありて其手に取らず性懶惰且貪欲なる者なりて たゝ食る事のみいひ居りしとぞ

此時弓を射くらべせしに射術に至りて感心せるを
其ほまれいへることとし
このくて皆し又仕上解帆せんとする頃ハ彼トンゴス
も又何方へか居所を移せり
アンカリツケの内に河あり（名ふ少島を接に アンガラ河するゑ）この川アモル
是即支那所謂といふ川に合しオロシア領とクタ
イスコイ支那の領分境をなすといへり
バイカル湖より水源をなす川多し其中二千

五百里の間ヤコーツカに流るゝ川あり又イルコーツカに
流るゝ川ありニコライと云其湖水のある口の北之
又トゴリツカの方へ流るゝ川有といふ其外にも川
しも有る数多し
イルコーツカ滞留中いつれの年月ハ忘れたり日
蝕六分ありけたる事あり右土地の人ハ更に驚
きす役所なとにても測り見けることも有りしとぞ
イヱベラトリ（帝爵 帝號）の国ハ世界の中四ヶ所有一ヶ所

の名ハ異人毎す一ツハオロシイスコイ魯西亜二ツハ
ヤッポンスコイ　日本　三ツハケタイスコイ　支那　なりと
そ

茂質按ニ一ツハ入尓瑪泥亜（セルマニア）欧邏巴洲（ヱウロッパ）ニ係る一大
國なり　和蘭にて（ハホーゴトイツ」又ドイツラント」といふ／一名子イメッカ魯西亜にてハ子イメッと呼ふ由）なるべし
弐ハ都兒格（ツルクヱ）　魯西亜ハトレッコイ又トロッカ／又オトコンスコイ」といふ
應帝亜（インテア）　魯西亜イン／セイスコイといふ　其帝号なりと聞けり
大莫卧兒（モトゴル）といふ抔　凡そ五ヶ所なりとぞ　我
皇都なり

日本ハ異域ニ比すれハ土壌狭小也といへとも
皇統一世萬古不易帝爵の國躰ニして
他の諸邦ニ優れることの外域のも尊ミ畏
服する所以なり往年至りし伊勢光太夫（並ニ）
弐度の漂客等まても彼国の人々語にいふ
我国ハ土地ハ狭小なれともインベラトリの國
なりと称美せしと聞けり
先年光太夫等を護送し松前ニ来りしアダム

キリロイチラツクスマンも先年ベドルラルカにて病死
せりといふ其父（モリロイイチーヒ）去巳年都（ベドルフルカ）よりの
帰途トボリツカといふ所にて病死せり此人種々の
書類を集めて所持し親しく往々著りと
一体学者なりとの噂何方も惜めり其子ラツクスマンの
死去ハ其後の事成りと云
扨又キリヘセイチ光太夫を厚く世話やきし
人ときこへり都へ公用にて出りの節同居し
女帝へ帰朝の願をも深くつたへせしと之厚
識有りし萬にて本草を好みたりとも此業王命
を受しとなり光太夫をオホーツカへ送り来
りし時にも採薬せりと書類をハ取つめし
のミ学ありしハ所云にて実ハ本草家といふ
者なるらん
外といふものを見受す要本趣く園要なり何よ
らく一切拝まりける要なれり

博奕ハ國中堅く法度なり私に戯むるゝを免たるに名をカルタといふ札数三十六枚あり男女の人の形をなしたるありカルタイケライといへハかるたをうつてといふ事なり日本にあるカルタも海帆の時南亜墨利加（アメリカ）までポロトカリ人の流布せしを免すなりこれハ全く我国に有る物と同し

按にホロトカリハポルチユガル（彼尓杜瓦尓）我邦にいふホルトカル（又仏く南蛮なり そといふ）即耶蘇教法を弘めたりし国の言ニ一ツなるへしカルタと云辞ハ惣て牌（フダ）又骨版のるいなし欧羅巴洲中通用の辞なりとそ今ハ諸国博戯の一名となりて通称まて家方ヘハ耶蘇會士の傳へし奕器なるにや

儀平爲巴人帰帆のとき紀國帝より名賜り被附斗ハ郡府にて作りしものなりとそ此被附斗四箇左に皆献呈せんことを請願ひしに其中一箇をとゝめられて三箇ハ皆返し

袂なる茂賀へ出れしを抜き之を見れハ

A Tovey（トハイレイ） London 26864（二万六千八百六十四）

といふ数十字を彫り付あり是を読すれハ他ハ無すべ

解らずといへども ロンドン 籠動（ロンドン）とあるハ漢又利亜（アンケリ／アンゲツコイ）の

都府なり此類器動製の物阿蘭陀持渡りしも

夥くあり全く漢又利亜（イキリス）細工と見へたり

國人殊に根付時計を携ふ法ありて居られり故に

光夫も自ら時計を知れり

漂人等新都の名をビセルホルカといふがまゝにペトル

ブルカと呼来りし故押てこれを質すに彼人ハ

ペトルブルカと称するをヒセルホルカと俗に訛りて申すもの

なりといひき故に本編皆ペトルブルカと記せり

按に和蘭にてハヒートルペルグといふ

ペトルブルカの都へハ諸蕃國の人来り居るといふ其中

地名を呼覚えしハ タルタ 韃而靼（タルタ） 子イメツ 佘瑪泥亜（セルマニア）

ガランツケ 和蘭（オランダ） アンケリ 漢又利亜 ダンヅケ 帝那瑪尓加（チ子マルカ）

スウエトツケ　雪際亜（スウヱツア）の都にて七十七ケ國の人々来り集り旅宿するも有りまた永住の者もあるよし我等といふ事を志らんとなり是等と引合せられハおかしかるものもれく又服飾大概似たる者有之ハ知り分つへき様もなし　但歩行せし途中にて黒人（クロボウ）を見かけたりいつれもオロシイアの服を着し腰にハ根付時計を提て居たりしか其面ハ黒漆を塗りたるかことく真黒なる故聞きゝて問ひ尋てかくと知りし之此黒人のよしハアラツパといふよし哀なり其後通詞も又く阿るよし之数日在留せしがガラフといふ官人の居館の近所なる　イノスクシノ。コレンゲといふ大役所あり此所にハ右の通詞役の者なとも居るよしなり

イノスタシノを外国コレンゲハ役所ともいふよしときこゆ外人の衣食住の類何事も此役所より支弁ずるよしなり

按ずるに黒人ハ南アメリカの人なるへくアラツプ

といひしハ地名か又ハ種族の名か詳なることを
をしらず

諸国より使節（ホスウニシカといふ）来り居る様子なり何の子細
にて来るやしらず何事も議論をなせしよりユマン
パフカラフといふ帝国の彼よりイミレバニ伊斯把尓亜（イスパヒア）乃
王（王をコロリといふ）よりの使者なりといへる者返答せしか
是へありしかハ外国の使者なりといへるか拾五六
人も是へ来り其国々の名ハきゝしも覚えす

上支の人々ハ其国言をはなす多くハ子イメツの
辞をつかひ見ゆれハ能く諸国の人々ハ通弁する
友なりとそ但し帝王のおゐてハオロシイア辞を
使ふとなれりさてガランツケケハ阿蘭陀なり子イメツ
とガランツケとの詞ハ少しの違ひなりといふ
按る子イメツハ入尓瑪尓泥亜（セルママア）なり　和蘭又は
ホーコドイツ　即ガランツケ和蘭の宗国なり
和蘭語ハホーゴーイツより轉し来るものなれハ

たも可なるへし

漂客等子イメツ並オロミイア所分の地まて
回船の水辺の害にやと覚へ来れり（光太夫もその地乃
不案を志るさん）按ニ子イメツハオロミイアよりゼルマニ
アを称して呼ふ名なり

（子イメツより婚姻せりといへり是同族にして又帝号の重なれハなるへし）魯西亜國志
訳説曰ムスクワ京城の郭外入尓瑪泥亜（セルマニア）
國人所居の府アリ造営美麗ニして
人居稠密ナリコレヲ名ケテ「スロクウヲダイニセム
スカ」ニ「ーメツカ」と号すと云 漂客等ハこの
事を夢ほとも知らす此地と思ひしなるへし 蓋
子イメツ之属州ニーメツカなる事疑ひな
しゼルマニアの一名ヲユーメツと称するなり
其地説にも見ゆ

スウエイツケ 雪際亜といふ國其地の宜き所ハ皆オロ
ミイアより攻め取れしとて今の新都ペトルブルカも

スウエイカケの屬地なりしがゆゑあり残されて自立せるスウエイツケ也 今ハオロシイアより給米を送り來すといふ噂もきゝたり

先年光太夫等を送り來りし時献上物の贈礼に新奇の大長刀をつかはされしと是を彼より日本作の新兵器と称美し國家の一となし秘蔵しイルコーツカにて至寶をきゝたり

漂流等曰オロシイアにて阿蘭陀をカラヒツケと呼ぶ

又新和蘭をノーイロトランゼ（新）と云彼國版の地図中に見ゆ太十郎携へ來りし世界図説なる小冊中に見ゆるに

和蘭 ГОЛАНД（コルラント）

新和蘭 НОВГОЛАНДІЯ（ノウ ラン シヤ）（是ヲロシイヤ文字オロシイア綴ニよれり）

「Г」魯西亜ニテ「ガ」ト云尼勒祭亜（キリシア）国ニテ「ガムヤ」と云フ和蘭にて尼勒祭亜（キリシア）字ヲ註セル書ニ「Γ」即和蘭ノ「G」（ゴガゲ）ナリと見へたり因て思ふに和蘭の事をガラヒツケと称すといふものハ「ガ」「ゴ」一類の轉

なりけり
帰帆の節大洋中にてちくハ世界の土中へ来れりと
て疑ひを発せり然れともへも進むと促せし又
志ばらく船走り数百里且りてちくも土中へ入れ
るとて回しく疑ひしに再同に復へり其所を
エタットル」といひし緯の中暑き所なりとぞ
按にエタットル」ハ羅甸（ラテン）名和蘭にハヱツテルレ井ン」
と云（中線ノ義）即赤道なり世界図を閲するに

初回に亜弗利加海にある赤道直下の海
上と見へ再回に亜墨利加海上にある赤道直
下なりこれ実に一大奇事といふべし欧羅巴（エフロツパ）
洲の人世界を航海することを始とする所といへ
とも一回ハ赤道下を通船せし両回に及
へるハ常にあるへきことにあらず魯西亜人も
此度の船路初ての通行なりとぞ此度の船
人事新都の川口を発しカナスダへ赴大船

に乗り組ミオ、ストゼイ江と呼る湊より出帆し
てカンカリ諳厄里亜（イキリス）へ船をよせ夫より南へむかひ
加那里亜嶋（カナリア）亜弗利加洲（アフリ）へ至、よりあつさを加て暖く
して赤道直下を経。南亜墨利加（アメリカ）へ向ひブ
ラジリイ江エカテリナ江へ船を寄せ数月滞留されに
り同洲の出先きヒエールランド江といふ所の岬を
廻り此洲を左にして渡海し再ひ赤道下
におり是より遥の洋中ルケイス嶋に船を
泊め水をかふカトスタより是迄彼里数十六千
里（按に我里法に千三百七十零里三六八なり）ありといふ又小亜墨利
加とあるに右にして夫よりハ東北へ乗出し
亜細亜洲の東北隅カミシアーツカの湊へ着し
又南に向ひ日本東南方の沖に行る湊を
を過き通りて遂西國九州の辺隅長崎に
至りし也天下四大洲方の壹洋をミく経
歴せりといふへし　和漢古今未曾有乃奇

事これに比すへきこともあるましき之彼人〻等も此度乃大經歴を誇称せられしと雖とも航海を業とする者尚已に海帆ハ日本の西北海を巡り蝦夷諸島を右に見て乗廻しカミミヤーツカより我国の環海一周し又乗廻日本の東南の沖を通りて支那の南海を渡り廣東の港に舟をよせ印度（イント）（アヒケリ）百尓西亜（ルミア）亜（ア）㮰比亜（ラヒア）海をも通り亜弗利加洲の南角を過りし此度赤道無下をとるきこと行きはしめの海路をとりて西北に向ひ本國へ帰るよしの大業なすれハ萬〻事業とするにも足るほきこれ個家東方諸國乃人にあつてハ寛懌三千年ここ下縦横無尽の一大奇事なりこれ孫ゟ天竺といへとも国より来りて萬て伝さ而るを嗚呼事なるかな其の航路昔代未曾の事なり従来我日本の舟を膽に乗って支那地方の諸

浦よりすり去きハ其南方安南天竺方角の諸地に漂着せしものハ是迄数國あるを記しぬ其中にも彼の伊勢国光太夫等ハ北海の邊浦へ漂着し夫より魯西亜の内地に入り其本國欧邏巴洲の都府迄至り数年を経て帰朝せしハ未曾有の奇事なりしかこれハ原路を通りてオホーツカ港より松前に帰着せしなり此度仙台の漂客ハ亜細亜洲より欧邏巴洲の都下に至り其湊より開帆して亜弗利加洲亜墨利加洲等の巨大海を一周して蒼溟数万里の海路を渉りて帰朝せしハ漢土日本ハ固より東方亜細亜洲方の天下古今上下未曾有の一大珍事の定論なるへし

此度の船に献之品と見へし火の發する仕懸の機関あり其の様并に何する掛の方に左を以て出し

もの有り是を廻せハ糸に從へて火光發す上に人形
あり小筒の鉄炮を持せし立円發火ハ其鉄炮へ移り
て玉を發つ寫を寄せり又平盤の上に纎細工の
人形を伏せ置右仕懸の所を見せハ其人形起立て
踊る器ハ何といひしいかなる仕懸のありや奇妙の
器なりと思ひたり

按に和蘭持渡りの機器ヱリキレルテイとは
てこれ俗にヱレキテルと呼ふ物なるへし人形

に鉄炮をうたせたるハ新奇と覚へたり
公邊異書の中に載する獻上物何れも異常珎
器の珎くなり近年已來製造に至かり漸新船
おに舶來ありたるよし其中大鏡四枚ハ至て甚大
の物なり長四間餘横壱丈五尺程厚サ五分計り
裏ハ板張縁ハ金縁唐草様の物彫りて有寸餘補
子鏡大小四十餘ありムラくといふ白石の板又盤
の如くきりたるあり是ハ机之物の臺にも用る様子

有り又此石にて歴代の諸國の像を彫刻せる
ものもあり
按に「ムラシ」と和蘭語にいふ「マルメルステイン（石）」にして我肥後白島の白石の類と見ゆ白瑪
瑙の属なり
織物の巻物も数箇ありセイウチの牙ハ三尺より四
尺位の物十五六本もあり此外種々の物数多あり
船中ハ大抵献上之品の物のミ積ミ来れりと余も
皆船中要用の品斗りにて交易之品のものと
しては一切なしと見へたり
光初漂着の處を始として「オロシイア」内地に入り
帰帆迄の諸國の人を見又且出會もして容
貌言語も各異なる者其数を挙られハ左の如し

アリオウトウ　（初め漂着せし「オンデレイツ也」諸島夷族惣名之光太夫ハ「アンオーツカ也」といふ）

オホーツカ　（本國の地なるへ初めて着船せし湊之）

カミシヤーダ　（カムシヤーツカ人といふす）

ヤコーーテ　ヤコーツカ近傍の諸地ニ種類の人を指していふ

ブラーーツケ　イルコーーツカ近在去着人数惣名

トンコス　バイカル湖邊の人名

タルク　韃（タ）而（ル）靼（タ）

ケタイツケ　唐（カ）山（ラ）

チワミヤ　イルコーーツカより新都との中間に
なりといふ處の地名

カノイカ　ムスクワ近邊の人

アラップ　黒（クロ）人（ホウ）　アメリカ人なるへし

カルラ　小人　丈二尺四五寸あり

按にサミイデンといふ地方矮小の民あり今オロシイア領と成りしと聞ゆれハ其土人なるにやイルコーツカに在し日新蔵噂にカルラと云小人有といふ事ハかねて聞たり頃まて使節レサノツトの宅へ伺ねは引きたりし日晩飡に来りし友人の内ハ小人を伴ひ来れるを始て見たり又見送りの人にてカナスタの船へもつれ来りし度来ニ見たりと世界中に小人國有りといふハ昔より和漢に傳はるゝをれとも未其実否を知らす　和蘭書にハサモイデンの地人小人なりと記しあり　不思議にして家　日本の人間のあつまり始らし邂逅（テアイ）せしハこれ又一奇事なり

スウエーーツケ　雪際亜（スウエツシア）

アンゲツコイ　漢又利亜（アンケリア）

ハラニソースケ	彿郎察(フラニス)　フフンツーツ
タンツケ	第那瑪尓加(デナマルカ)
イシパシ	伊斯把你亜(イスバニア)
ポルトカリ	波尓杜瓦児(ホルトカル)
カナリツケ	加那里亜(カナリア)　（イスバンの人征拓して　領知とろすといふ）
ヱカテリナ	南亜墨利加(アメリカ)伯西児(フヲーシリー)の内
マルケイス	アメリカの孤嶋
サンペイツケ	同　右二嶋小アメリカに属す[illegible]へし

右二十二類小亜墨利加洲（最初漂着のオンテレイツケ諸　島ハ小アメリカ洲に属すといふ）

亜細亜洲　欧邏巴洲　亜弗利加洲　南亜墨利加(アメリカ)洲

四方の人悪を見知り法教すべきもれさ多すこ之

魯西亜の人数ハ何れも丈高く髪薄茶く眼彩(メサヽ)ハ茶色なり三化の人〻の事ハ委しく見とめす

上白墨(ヱビリ)（かふより東北カミシヤーツカとを　越て称す大洲亜細亜に係る）の人数ハ丈ケ短く

髪黒く眼も黒し

傘を八本骨にて絹帛(キレ)にてはる上へ張り国由老人ハ

雨天の時ハヱロツパ帽笠と羅紗の合羽を用ゆ羅紗ハ緻く雨をもらさゞるの之着るに濡れハ引たてゝ水氣をうちくふりて落しけるゝ干し置となり檣を立て艫より押す事ハ日本國升りと見ゆ日本漂流人を船よりイルコーツカへ送りまゐる伴ひ行きし役人某ハ（何レオレキサンダラといひしと見ゆ友ハポポコーチクといへり）皮袋を襟よかけゝし往来せり其袋の上よハ雙鷲の國號を附するもの之旅路の鑑札なとゝいふもの〻

又是布ろといふへきものあるや石中紙ゝまて人之を見て感服致し何ぞも聊か遅滞する事なれしこれをメツクリと前よ見ゆとハ又是等の違しものにや粘の用となすものハ膠（ニカハ）のごときものゝ異なりといふ何とやらいふ魚の腹中よ採りたるものありこれを煮いせらし用ゆ紙等の物を接（ツ）くよ皆是を用ふ又粘着する之書簡の封しめハ赤色よて小さき棒のかく作りたるものを蝋燭の火よて炙り滴らして

塗り法あること又革を押す之

按するにこれ和蘭にてプリ（出営）ーヒラツカ（蝙）といふものと
云由也白臘と松脂と合し黄周にて色を
法ありしものなり

革（ツクリカハ）にハ羊（パラミ）緜羊（ヤマニ）野牛（コミヨウ）の三品に
て作るコジヨウ別にしるし鹿皮牛皮の二品
ハすへてよきなめし皮にハ製しかたし日本にてハル
ミヤ皮と唱ふるものハヤマニと云由此度蘭人の持渡
りし皮蒲萄皮抔ハヤマニの皮之都磨にて猥古
両枚りし求めまれなり

去辰年彼暦数二千七百八十五年といふ此年
女帝エカテリナ崩すこれをゴツクリペレスクウ没り
といひし是ハ天下様法遠きさるゝそれたといふことそゴ
ツクリを崇め称するのにいふ辞ペレスノウエーレハ
帝王の死去に限りいふ辞にて老人にハいはすとそ
按するに崩御ともいふなるへし

凡そ新婚甥婦床入となりて其婦妹の内室房の
外に伺ふ既にして其新婦己か襦袢を脱して外にある
其女に渡す其着是を改め見て其志るしとすへき
由あれはこれを其所存の内室方へ送る室方よりも
大ひに悦ひ甥も殊に新く女親雙ひ迎ふ婿其女
是へ臨をつけて祝をなし又立て女親の口と己か
口を合す是を式なりとそ若又志るしもなかれは
祝には周より新くすれく婿ハ家ふ彼新婦の女
親ハ殊の外氣の毒なるといふこれ新藏話なり
間新婚の婦年の長幼の論なくかく有その
事不審之といひなれハ
答彼人思く日本根より生ひ立の変れるす
多かれハ初縁の者ハいつまてもかくなるなるやと
いふはなり未た信しかたし按るに本朝古禮の繼
勝を其禮衣に流し敷して年長けても
初縁なと称するの意なるや

オロシイア本國鏡なりといふ瀬戸物額外面に金をもて
き法本にてゑかきたる物數種 エマンゾフガラフの象
まてゑかりき

象と馬とをは睪丸（キンタマ）を去る之象の丸をとるを見たる計
先ツ其皮を竪にたちわり玉をあらはし手を以て
ビフイとするもをおし其痕へ塩を押込を坐に殺しやる之丸を
去りたる後ハかくのことくすれハ肉よくつき脂もよく
のるといふ帰

按に食料にするものを肥大ならしむる為なるへし
阿蘭陀にてハ食料のために牡牛より睪丸
をとる之此キンキリ牛をハ「オス」と名け常牛を
クーベース」といふ雌うしもいへるなりとそ共に脂
のりかゝり肥大ならしむる為なりと云へり
和蘭にて象ハすりとるゝのハ未た知らす本邦の
海辺諸地なるわきにてハ犬をならし使ふにより
此犬も皆睪丸を去るといふ

為ハ使なるハ熟して貮歳になれハ睾丸を去る故耳鼻も
さく之也此生れハかん活にて喜を化して筆跡すさるなり
但し父なるにするハ此なりて及ます故殺て使ひるハ是
極て焼所をなして持主の名をホッ睾丸ハ人皆も
持戒の僧又ハ出家故ハ玉去るといふ七九年光大丈
とのりられり

按に睾丸を抜き去れハ男女の情慾を絶つ故に
肉膝肥瘦をなすことを理詳なるなる事ハ實に浅しぬ

扨そのくきこ人たる者とれへいつ程に擬めても又其の
如く伴ひて王座になる也又前ハなくして生きの分貌
剃るなる故之實き透きとの用をなすとのまや
人ハ正月と年の改りたる時これハ年を重ねし
時とハせぬ故に誕辰にあたりしをあかる日より一ッ則く
増して年齢を称する也此時年を重ねる日とて
尤生れ日を祝ふて此度たとへハ去年の人二月に
の生日なれハ二月に至りて去歳になりて次人名を

古宋と一日といひ三月二六日に至れハ古寒と三ケ月
二日といふ之丈夜死去して享年を碑に彫り附るに
左四拾壱宋幾ケ月幾日半抔と書する之
按にこれ凡そ欧羅巴洲の風俗と見ゆ洋中
まて死去し長崎の悟真寺に葬埋せし
甲必丹「ジユールカープ」の碑面を見しに享年
何歳幾月幾日と記せり抑生辰を祝ふ事
和漢ともに有来りしことなれとも其日を
以て齢を重る時とハ定めす冬の十二月に
生れても翌正月を二歳とせるといふなり
島のまつるといふ事も有り多くハ何島か志て但し
度しハ見當らす
板硝子を切るにハ水晶の如き玉石にて筋を付置
たちきるなり石名不覚
按に蘭邦にていふキヤマンの正名ハ「デアマント」なり
大光曰オロシイアにてギヤマンをヒリアンと云す

ツレカといふ病彼地方に多く土地沍寒にて人に係る病と為也常に烟草を吃する者ハ此病を防ぐといひ傳ふ此病一体毒或寒気に中るより起る病也とぞ（烟草気ハ温気を導るの性功あるゆゑなるへし）其病先ツ初發ハ齦肉悪色となり軀體手足筋絡をひきつめ肉硬くなりて色悪を帯ひ紫になり動作するの能ハす疼苦難す と牽急をなす不多し膝膕なり 漂民光太夫も漂流沖合にて此病を受立すくみなりて一身ハ轉動をする事能ハす漸く人の肩にすかりて二便さへ人の便したり退て後常ハ忘るれとも於今足頭牽急し歩行不自由久ハ痊ハ難かる也同船の内此病に罹りし者都合三人迄ありきヲホーツカ辺まてハ厳寒の時節ハ毎々此病苦の者多しヤコーテ、ブラーツケ等此病を患る者を見ざる所常に烟草をとりて食ふて預防する故なるやと人々いへり土人も甚これを恐れて病患なりと厭ひし

上齒齦腫

療する者あれハツヱカまでハ来しや拾ひて人く
なかり云ゝるよしなり
按るに此療和蘭にいふヱケウルポイツといふ病を
養所哉木のツヱカの療と符合す是醫
宗金鑑の書に出す所の養腿寸麻なり
イルコーツカに遊樂所となす酒楼ありこれをクラ
ビセライレと名つく
大光曰料理茶屋をカラヱヱヤウといふ或ハこれを
いへるよしハあらし酒やといへり
年代要覧等にいはく餘程大家ありて酒の数も種く有
上好と称するものハアメリカハラヱツースケ等より
来る物なし牧果あり熟して葡萄酒の類通有
座中にハ玉突きの戯れを設け有る之此突き玉の
戯をベレヤロといふ（按和蘭にてハビルヤールといふ筈状の頭に弾なり）婦人へと
此楼に来りて酒宴を催して戯れ抔ふ下物（サカナ）の
類ハ他より呼ふなり負に賭し猶く玉突の勝

貞女とすし　婬女をあらしるにして婬楽む婦女
もあれとも更に隔なく物を互相の事なれし唯
携ゑ見えまて互に信ふを貴人見えけり又處に喫
煙草數種あり白きまて製しやきとものにて
しつる煙管有（和蘭ヨリ来ると云れはケタイツケタハコ　唐煙草）（日本ともいふ由）
をも盛りこしのましむ一服の價銅銭五枚なりしとそ
此種不下多く上等の人も来り楽むものなり
人或ハこゝにまて多くの銭を費し法ねよハ至難之
しく窮たまる族もおほかりしとそ

使節レサノット官職累級のまけたしるを不分
按に阿蘭陀人訳文和解書にはヘートル
カームルといふ重役の者なりと見えたり
職ハ外官なりし内官も兼るものにや
外官にて国王の身をとくもある役等はすきなり
此人の弟某ハマヨルといふ官にて在勤するよし
レサノットの妻ハ前にいへるイルコーツカに有し豪

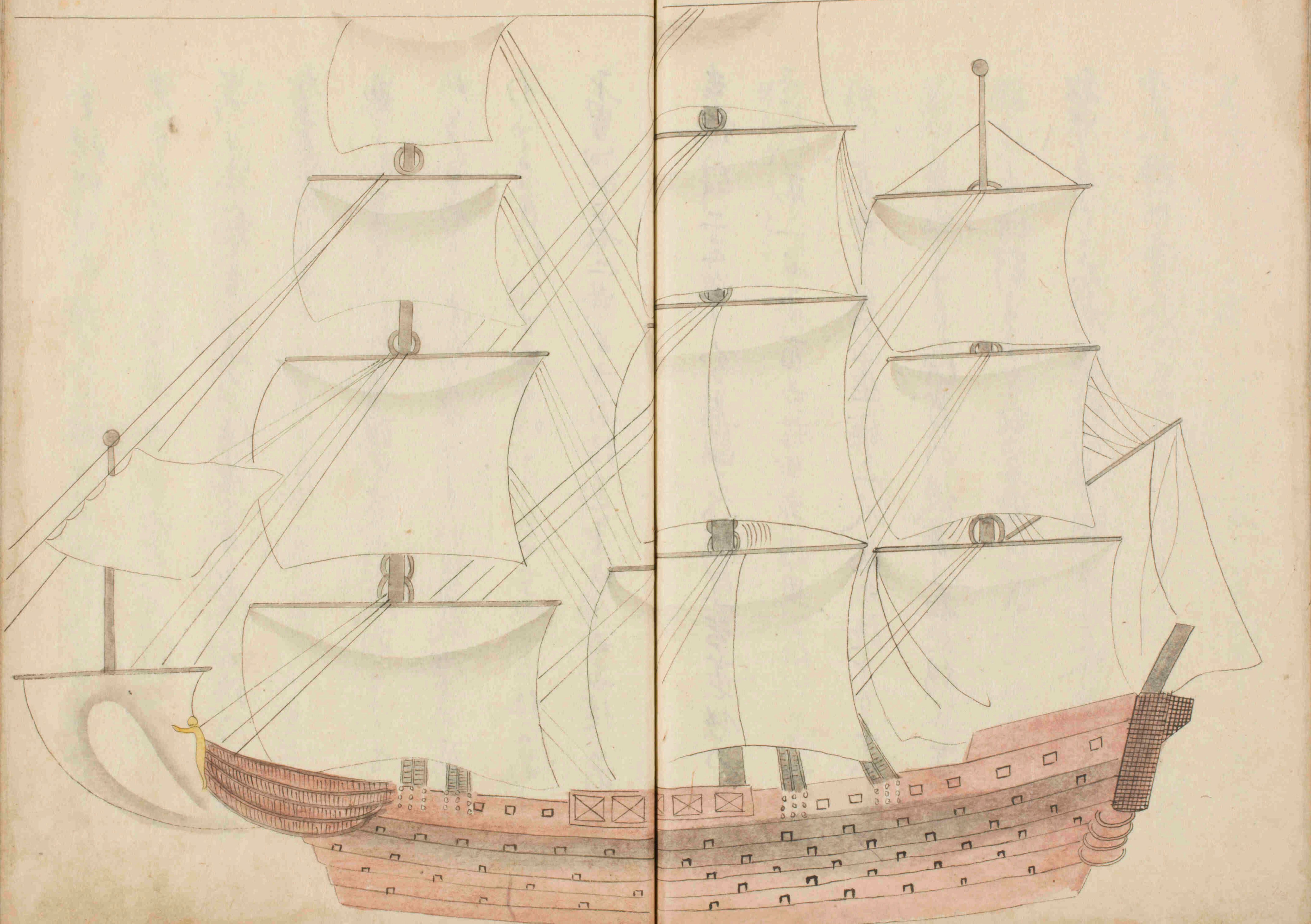
商セリコリの娘なり縁談ありて七千里の途中
イルコーツカに下りて婚姻を整へし也其妻此度
出帆の前年（戌の年なるへし）故ありて病死せりとそ
亥年彼国暦一千八百三年なり外国へ使者
立てし八十年始めなりと承れり
按ヌ崗主となりて宮勤といふなる文位
秘まし海之大臣ゟ日本への使者出せし
事の初めなりといへるなるや萬代度ゝ小東
等へ使者往来度ゝありしと聞たれ共
日本人は手習し唐人は虚飾（カザリ）多く実なし譬ハ
氷砂糖を交易あるに渡するに其内に木片（キレ）と
入れ置く計るましき仕形なりなと噺しけりき
本国今時に至りてハ世界中遍く通路せさる
国なし　但其国よりしありけるも日本なる是を表
立居用なしとて毎度噂ありしときけり
カラニツケ　阿蘭陀　近年国中乱まて国王も弑され

て今時ハ王ゑれし魯西亜軍船を悉しこれを
平均し王畏ニ番兵を並ときたりハランソースケ
も同様なりといふ船中ニても役人ハかくと相違なり
按ニ近年戦争相續し風説書年々ニ見
ゆしか王を弑せしといふハいかにや又王たるて
エンゲランドへ逃けのひ居ましてもいふ世宝年
己未の風説云々書ニ当節ハ本国筋漸
平穏ニなりしと記せり右たる実否を志らん

本國より献上物阿蘭陀ニ施し先年分毎度と
送進したり此れを毎度さしおせしと傳達有り
今ニてニ来り関孛生れハ一向其沙汰ハなしと乃
噂をきゝて志従なくし大ひニ相違せり定て後あれハ
夢拂しなるへし甚不審なる様子と申せしも
按るニ此事も亦実へ有か虚説か無へからん
ベトルブルカ逗留中藤崩りユマンゾウカラフ上の至而
まて七百人余の軍船の新造有り津太丈宮所きて

見へりしに長さ何程と云事なし高さハ庭より八九尺も有
へし四の方ハ松の厚板にてたゝき其表を又松板
にて張たり其上へちやんを塗たり海水へ入る通り
銅にて包たり是ハ水の透さぬ為といふ帆柱も松の
木を用ゆ三本継にて柱ハ両本たに継き目へハ
鉄をまく太サ四五尺へあるへし長さ（但中松ナリ船）
（大木なきゆへ舟板皆松なりとそ）船中石火矢數挺を設け乗船へ上下
するハ傍なる船より縄階子を用ゆるなり

兵粮は二三年分舟中へ積ミ皆蒸餅のよし
壱人前一日ニ百五拾目宛の由
百五十目の蒸餅一人前の法より十分なる
ものゝよし此度の使節船に積し蒸餅
も此割なるへし配分斗り
船中なる太鼓造船の号圖しるへし者有り
下に挿置す



金銀借貸の證文を認る皮紙あり 西洋奴隷の
売買あり是を買求めし證文を認むこれによりて
若し約定を違ひ返済せさる時ハ公訴の上處科
を蒙ることゝす
奉公人ハ一年限の定め之人数によりて給金
の多少あり 大抵召使せしハ番頭（日本の）百両位に
あたる手代同 五十両位より三十七両二歩位にあたる
下男同 七両二歩か十両位迄下女同 五両位にあたる
人足請人口入抔もありて證文もする事なり 人足
一日の雇代（日本の）壱歩位にあたる中人同 拾両位
にあたる下人同 弐朱位にあたる此以下凡五両位
ゟ何等程の手間代もあり
豪商キセロフか水車場至て多し 多くハ麦の
粉を挽かする所なり 其中近来此地にて初めて
出来りとて水車の激勢にて大材木を板に挽
かせる所あり 廠（コヤ）の内に大鋸三十掛りて至甚速

其の本へ大材木の小口をのぞかせおくに水勢にて断て

ひきよせらるゝ是を挽こむに従ひ材木随ひくと進

ミ入川のために引きよせらるゝなり又其河ともに其の材

木を纏け置き先きの刃の挽終れハ元の度をはく

なりぬれ其基に仕懸ありてかくのごとく便利なるは

地底にて機轄を設けしと見ゆ其ほかの人夫絶

にありて挽割たる板をとり片付まてのことなと

を纏けるといふすとなりかゝる仕懸を度人力を費さぬ

して数枚の板に挽割の器に設けたる也

其仕懸の工夫水勢井程合をためし識らんかために年

とよるなり再三識て仕懸せしも数ヶ度是によりて

太造の費用をうけ茲に成就し永世の大利を残せりといふ

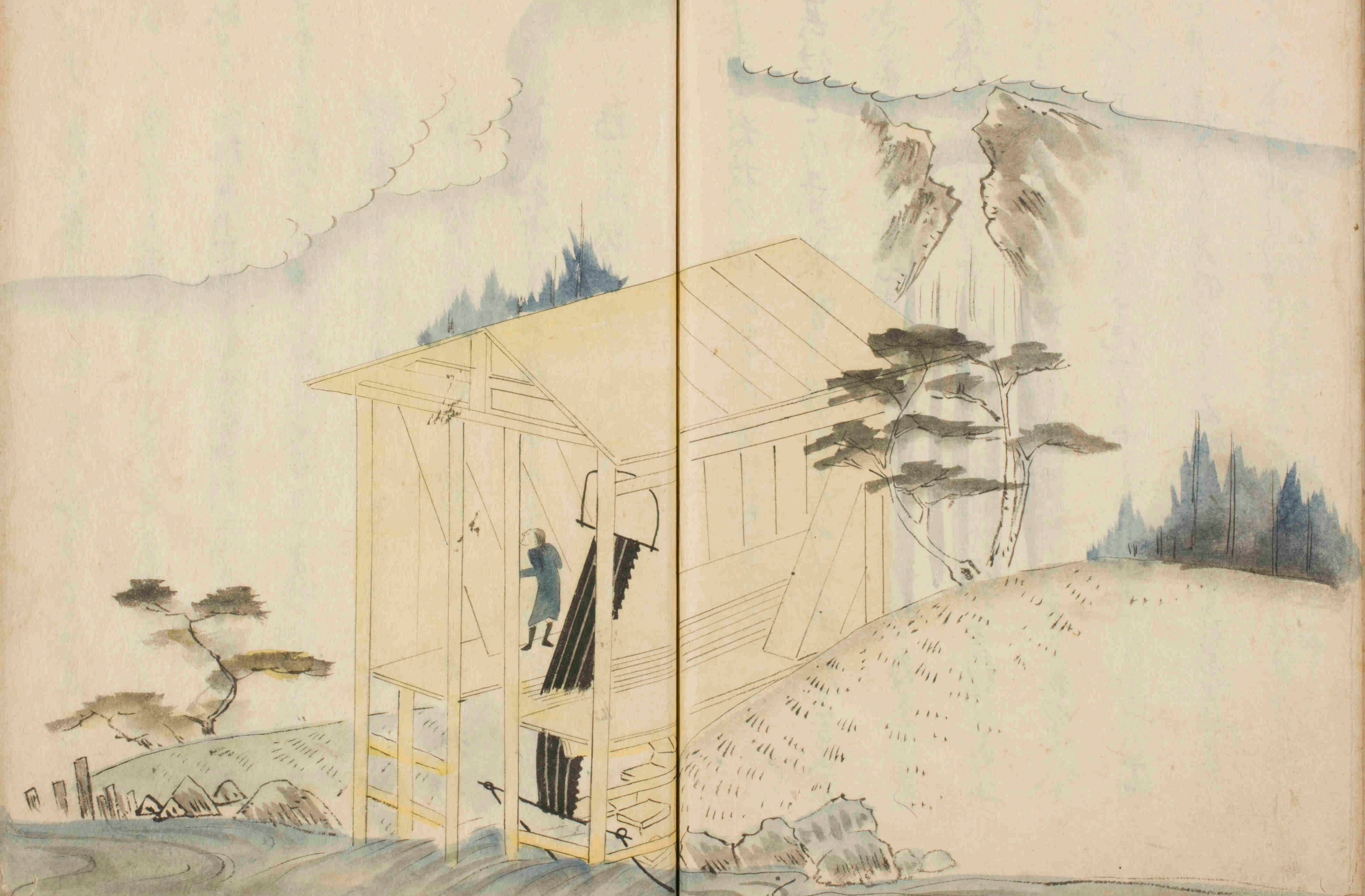
按にヘトルフルク紀府暦中千五十六年に和蘭人サ

アカモーレンス」と記せりサーカハ鋸之モーレンスハ右

碾（ウス）なりと水勢にて石碾旋轉して材木を鋸解するなり

イルコーツカにてキセロフが創製せしものハ巧人

其これを見受けるし擬せるものなりや



此工夫ハ罪を蒙りて赦さるゝより此島去に来り巧し咎人（トカ）柔なる者の巧あるよし甚妙巧に同職を驚かしたる上にて製巧見も少もとあさりしとなり赦さゝにハ第にあるゝのみや

此一事にてもキセロフの思量を大ニ推して知るへし莫の妻をおし彼をして弥ゝ精巧を成就せしめ後来に至て無窮の大利を為しめたり

按に此巧に似たるの器「大西奇異図説」といふ書に出版せしあり世に機智の人ありて彼と此と参へ考へ是を製さんとするの才を有せは此書にも又かゝる良便の奇器あり多きにや（茂質）漂客等ニ對問の際に此記略に説器を添んと思ひしかとハ此説話をききけるに悉く記せり故に家事一に略れる所の大畧を右にいとし是に似らしめたる

事となしぬ但し其罪あるものを流せる哉

遠根と呼るのミ

上（シ）白（ビリ）里地方廣漠の地を有り罪ミしハ多くハ流ミ変せし人々を使ひしとあり此弊を坊ミおせし流人もそれ／＼の中なるへし　イルコーツカ滞留せし日数の方より咎人の流刑なりとて二千人程オホーツカの方ミ引纏ひ行くるを見たり彼アウリム」の辺より「オホーツカ　カミシヤーツカ」までの險難の山路あると斗り昇ら志むるつとりあるすや

按此多人数実ミ罪を犯せる咎人のミミハ有まし何まとらいふ国と軍戦して擒ミ志たる兵卒なとミまてやあらん

井戸の制家國ミ整るまりれし皆を穿つるへき用ゆ契く華ミハ川水を流くゑ之婦人擁膝を流くるとの河り紙へつけたる懐中座まれり

イルコーツカの内一ヶ寺涅槃像の画をかけ置る
を見うけ候り全く此方にある物と同し

船中并ニ長崎滞留中見聞雑事

使節乗船表座り十四巻ニ出する如し

長三十五間余　幅拾弐間余

高拾間余　大柱三拾弐尋余

大むらん多縄三間　やりたし十三尋

帆数十八斤　石火矢三十六挺

船の左右の裾ニ石火矢十四挺ツヽ艫の櫓の上より
六挺又其上ニ小さき石火矢二挺自由ニ廻轉する

世々に仕かけたる物なり小なれども筒長さ壱丈余
ありて達すまじといふ右石火矢ハ海上にて海賊を
防がれし見るに表まてハ筒先を揉へ玉をも込置へ
鉄也玉の重さ二貫目前後なる趣也
砲も二段にして大ひなるハ西洋重さ「ラー」と
いふ法馬（フントウ）にて五百かけるといふ容易に砲を下すと
いふ事なし
使節居所ハ平生ハ二階目の座敷二十畳敷ほど
の座なり時によりて三階めへも行なり居まハり船の
一方より左右とも上へとハ皆硝子障子也日本への
献上物などハ船の方へ指置き船方ハ皆表の方に
居り役人ハ皆部屋々々に行楽
水主共ハ家々々ハ石窟のごとく造りたる物の内に
夜中ハ臥したり揺々々する板にしてある也之
厨ハ見事成唐銅にて囲ミ上にハ煙窓あり灶ハ其中
に有り右扉ありここより出入ハすれども貴

炊の間ハ固く錠しておしもかへ火の元ね

極りしるへきもの薪料

食事刻限陸と同し　九時と晩と夜食之

食料ハ　乾餅　豆（味噌豆のるい之）　塩　挽割　蕎麦

畜類ハ　豕二三十疋　牛羊八疋

雞二百羽（此外にも定りて多く有へし航間に遠あるに依て変さん）

船底へハ砂を入経て石を重ねり其上へ板等の樓を並

へる事数百之樓の長さハ七尺へ程等ハ船中まて

はなし大事に使ひ一日壱人に壱合平均なると

取るにはたえまなしとりおしも猶へ取ちかね極に

しかる物なり又中へ入るもの主ある八米酒なとの如き物

まて薪とも添ひしれり右等樓の上へハ食物数

樓諸まして並べ

端船ハ弐ツ被入置

帆ハ麻よりて織るものと上の方へ懸る帆ハ何程

も縫き合せしとす比細なるを用ゆ

舵（カヂ）ハ船よりハ尾之方柱ニ附けたし

本船の名をナデシクといふこれハ静謐太平なり

しを表したるものの柱ニ附けたり

乗組の人々役人ハ廿人あり水主ハ四十人

已上あり荒増し分ハ

アナラウ　マヨル　ニロライ　バイトルイチ　レサノツト

是ハ此度の使節也　魯西亜人

マヨル　官　三人

是使節従役のもの蔵之不絶ニ傍ニ附居る

此国よりし是使節の所ニても勤番

其ハ一　ヤルマノ　カルライ　子イメツの人

其の二　ミイトル　イツノイチ　ヲロシイア人

此人ハカミシヤーツカより乗込此地代官の者之

其ハ三　イワレ　イロシマノイチ　同

これハ是使節カベタン也右同所より入船

カベタン　二人　船頭　ポーポローチクの支之

其一　イワン　ヒヨータロイチ　同

此人ハ初めより舟を乗り習ひ師となり
七ヶ年船乗りせしよし廣東のさきまて度々
渡海せしよしその師匠ハアヒケリ人なり
有りし名誉の人にて先年世界を乗廻し
十三ヶ年目に帰帆せしと云船も三艘造り
聟にし其姓名ハ忘れたり　ヒヨータロイチ
は此艘カナリツケニハ積て来れりと也

其二　マカル　イワノイチ　ヲロシイア人

小船頭三人

これハ羅針など見且海上の星数を測る
是ハ索を流し引あけて算用して里を
知る役子なり

其一　イワン　ヘロプイチ　同

其二　ワシライ　ツレライイチ　同

其三　名不覚

下案針役　三人　羅針（ホーハリ）を見る役

其一　ヤルマノ　ヤルマノイチ　子イメツ人

其二　ペトロ　トロヘムイチ　ヲロシイア人

携来りし世界図を長崎滞留中見覚え
日本通船の道筋を考へたりやと察く
尤遠しハ数千万里の事なれハ不覚えといひ
是れハ上陸海図の後人々来る事有ても
困惑すへしとて海路を熟覧して覚へたり

其三　名遺忘

此等図書ハ彼地よく根窮まて求めたり

医者　三人

ドクトル　二人

是ハ従皮治る医師なり即使節の医師之

ラヒヅフ　イワンゲンコロイチ　（此人はダンツケより乗組）

此人ハ諸國の言語ニ通す此度ニ長崎まても
来りし通弁す画も細工も出来る人なり

壱人　名不覚

レイカル　壱人　外科これハ位卑き医師之

壱人　名不覚

コツプ　二人　兄弟之

兄ハ　十壱歳　医業見習

弟ハ　十歳　方針等の事見習

右人此妻童をコツプくと呼へり

画師　二人

壱人　名不覚　リヒツケより入船

壱人　同　タロミイア人

此人船中より病氣にてカミニヤーツカより

上陸致暖病之石（カミニ）のおもてなる病と申なり

草木鳥獣等を吟味する役人　生国不知

此人右画師　病者の療治手扱の為附添

カミニヤーツカより上陸

右の代り壱人　名不覚

硫炮指南人　壱人　名不覚

此人水主の内へ鉄炮の拵方打方ともを教しへ足軽代りをも勤めさする積りにて仕ひ来りしか惰弱にて我儘多く船中使節の命に背くことありし故カミミヤーツカに留め置く依て別にカミミヤーツカより足軽を入る

足軽　六人

カミミヤーツカより入船

マタヒス　水主也　数十人名一〻不覚　凡十人余

素絶皆〻諸国の産なり其中韃靼人あり力量衆に勝れり水主頭六人表に三人艫に三人居る此水主の内に無働をする者ハ勿論又皆縫仕立物より大工職冶業のことをも兼て居るなり

按るに右人〻の姓名承りしか遠故爰へ是へもあるへきを悉漏りにて書き上けし

姓名年齢の調へ書を得たりこれまて
傳寫のあやまり有に似たり 所本三又

環海異聞巻之拾五（大尾）